

# 始発駅 信州よ

駒ヶ根市出身

水産学博士

なかむら ともゆき  
中村 智幸さん (47)

したい！」（フライの雑誌社新書）などの本を執筆。各地で講演、著述、編集などを経て、文部省小説研究会員。

語り口は熱っぽい。  
赤穂小3年のころ。学校

漬し養殖した浮浪魚を地域性を考えないで大量放流することは、それぞれの川で遺伝的な特性を持つて続いてきた同種の魚を消してしまうと訴える。「その川にすむ天然魚を守り、魅力ある釣り場を整えることが地域の漁業協同組合の経営を安定させ、川本来の姿を後世に残せ

鼠川を橋から見下すと、寄り添うように泳ぐ二匹のアマゴ。のうち、1匹が体を横に倒し、体をくねらせて川底を掘つてはくぼみを作る産卵の行動を繰り返していた。「アマゴの動きとい

りを開始。最初のアマゴを釣り上げるまで2年かかったが「釣れなくとも川に通うのは樂しきつた。澄んだ水や木々の間を流れる空氣。山に囲まれた中で岩に腰を下ろし、母が作ったおにぎりを食べるだけで満たされる空間だったから」。伊那北高校入学後も「大好きな釣りのためめ」などと学校に申し出でバイクの免許を取り、週末を市内の

天然の魚を守りたい

溪流で過ごした

「漠然と」国語教員を目指していた3年の夏休み。進路変更を決めた。「一生打ち込んで続けたい仕事は何かつてじっくり考えてみたんです」。その時浮かんだのが、渓流の魚の姿だった。

いるのか、天竜川を訪ねて調査している。環境の大切さをテーマで裏付ける地道な作業が続く。

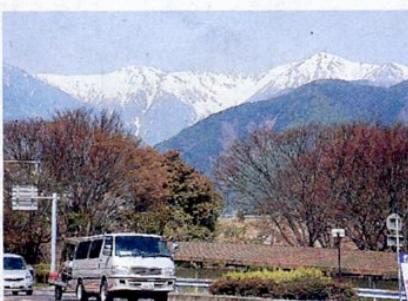
中央アルブレスは源を発して天草川に注ぐ市内の川で初めて釣った魚の記憶は色あせない。

栃木県日光市の独立行政法人水産総合研究センター生態系保全研究室の主任研究員。アマゴやイワナの生態や繁殖を研究し、川を禁漁区域や養殖魚を放流する区域、子どもの釣り場区域などに分けて計画的に利用する「ゾーニング」管理を提唱している。

「守る・増やす溪流魚」（農文協）、「イワナをもつと増やす



水産総合研究センター「さかなと森の観察園」の観賞用水槽の前で溪流魚の美しさを語る中村智幸さん=栃木県日光市



駒ヶ根市内から望む中央アルプスの白い峰。この山々から流れ  
る川で渓流魚の魅力を実感した

(毎週日曜日に掲載します)